

〈学術研究集会傍聴記〉

第2回国際武道会議 兼 日本武道学会第50回記念大会 傍聴記

小崎 亮輔*

Ryosuke OZAKI*

私は2017年9月6日から8日にかけて、関西大学千里山キャンパスにおいて開催された表題の学会に参加した。本稿では、私の研究発表の説明と本部企画シンポジウムの感想について記したい。まずこの学会大会は表題のとおり、日本武道学会の50回大会でありなおかつ国際学会でもある。5年前の45回大会で第1回国際武道会議が開催されていたことから、5年に1度のペースで国際学会も併せて開催されていると推測される。なお筆者は5年前の当該国際会議でも発表しているが、当時は博士前期課程1年であったため、学術研究や研究発表のノウハウが非常に乏しく、多くの先生方から指導を受け苦い思い出になったことを憶えている。それから5年経ったが、日本武道学会だけは毎年研究発表をしてきた。これまでに英語でのオーラル発表やスピーチを行う経験を積んできた。しかし、今回の学会大会は演題と抄録は英語であるものの、発表言語は日本語であった。研究発表は「人文系」「自然科学系」「武道指導系」「国際会議」「ポスター発表」に分類されており、国際会議のみ英語での発表であった。発表は口頭発表15分と質疑応答5分で構成されており、私は大会1日目、最後のセッションにて研究発表を行った。演題は“Relationships between the Stage of Exercise Self-efficacy and Health-Related QOL (Quality Of Life) in long term judo practitioners (柔道長期実践者の運動ステージ、運動自己効力感と健康関連QOLの関連性)”であり、中高齢柔道競技者の健康状態と運動習慣の関連性を検討するものであ

た。発表後、多数の先生から研究背景や調査手法について質問をいただき、非常に有意義かつ研究のさらなる進歩に活かせる発表となった。

大会2日目の午後、本部企画シンポジウム「武道とマーシャルアーツ：伝統文化と大衆文化のクロスオーバー」が、海外から多くの武道研究者を招いて開催された。まず、海外から3人の武道研究者の基調講演があった。どの講演も、日本独自の運動文化である武道の特異性や神秘性に言及していた。我々日本人には、歴史的に裏打ちされている独特の行動様式・理念がいくつかある。そのような行動様式・理念は現在の武道実践にも見られる。日本人には当然かもしれないが、外国人にとっては非常に興味深い事象になり得る事を感じた。そして最後に社会学者、井上俊大阪大学名誉教授の講演があった。「武道とポピュラー文化」と題された講演は、まず武道の歴史が形成期(1882~1928)、発展期(1929~1945)、戦後衰退期(1945~1950)、復興期(1951~1964)、グローバル化期(1964~)の5期に分類できることから話が発した(講演内では武道の発生は柔道の誕生(=武術・武芸の近代化開始)と同時と解釈されていた)。そこから武道が、漫画やその他のマスメディアによって大衆化・ポピュラー化されていった過程を聞いた。元々は殺人術であったため、万人が知るはずのない武術が、武道になることにより教育的な付加価値を擁し近代化されていったようだ。講演の終盤では、柔道創始者嘉納治五郎には武術を武道に改編し、ポピュラー文化にさせる先駆的な感覚があったという話があった。以上の話を聞き、私たち武道研究者が武道をより良い文化にて

* 順天堂大学スポーツ健康科学部
Juntendo university health and sports science

きるように一層研究に邁進しなければならない事を痛感した。

以上が今回の武道学会大会の感想である。特に、井上俊先生は私が研究者を志すきっかけとなった

「武道の誕生」を著されており、そのような方の講演を聞くことができ非常に嬉しかった。これからの研究活動への意欲を高め、改めて精進していくことを決心させられた学会大会であった。